

心理学 ミュージアム



横浜国立大学教育人間科学部 准教授
鈴木朋子

Profile—すずき ともこ

2004年、横浜国立大学大学院工学研究科修了。博士（学術）。関西医科大学精神神経科学講座助手を経て、2009年より現職。専門は臨床心理学、心理学史。著書は『心理学史』（共著、学文社）、『精神分析的心理学療法を学ぶ：発達理論の観点から』（共訳、金剛出版）など。

CIE 図書館



日比谷に開設された、CIE 図書館の開架雑誌室（1947年10月）

出典：今まど子・高山正也（編）（2013）『現代日本の図書館構想：戦後改革とその展開』勉誠出版 p.100

前号の『心理学ワールド』70号では、日本心理学会の資料保存小委員会による心理学者オーラル・ヒストリーのプロジェクトを簡単に紹介した。この事業は、文章化されてこなかった日本の心理学の歴史を、オーラル・ヒストリー（口述史）の形で残すことを目的としたもので、日本心理学会名誉会員を中心とした心理学者を対象としている。この世代の心理学者たちは、戦後の混乱期に心理学を学び、拡大する日本の心理学を支えてきた。まさに一人ひとりが、心理学の歴史と言えるような心理学者である。そのような歴史的な心理学者にインタビューを重ねていると、共通して話題になることがある。その一つが、CIE図書館。はて、CIE図書館とは何か？

今から70年前、第二次世界大戦が終結した後、日本は連合国軍の占領下に置かれた。GHQ/SCAPの部局の一つ、民間情報局（CIE）が民主主義の啓蒙を目的として設置したのが、CIE図書館である。CIE図書館は1945年にNHK東京放送会館に開設されたが、手狭になったため翌年には日比谷の日東紅茶喫茶室へ移転され、一般の日本人に開放された。この図書館では、戦時中に入手困難であったアメリカの書籍や雑誌が無料で利用できるとあって、多くの人が訪れたという。CIE図書館は全国13カ所に設置されるまで拡大したが、連合国軍の日本占領が終わるとともに移行され閉鎖された。

心理学者オーラル・ヒストリーで、CIE図書館を話題にしたインタビューは、大村政男先生、鹿取廣人先生、成瀬悟策先生である。先生方によると、戦中は、大学図書館であっても欧米の雑誌が入荷されず、心理学を学びたくても最新の研究に触れる機会がなかった。そのため、唯一、アメリカの心理学雑誌や書籍を所蔵していたCIE図書館へ多くの心理学徒が通った。CIE図書館では、競い合って英語の文献をノートに筆写し、持ち帰って精読したそうである。

さて、先生方があまりに楽しそうにCIE図書館の思い出を語られたので、CIE図書館について調べたくなった。図書館学の領域では、CIE図書館は、開架式図書館やILLサービスの日本における先駆けとして知られている。図書館史における、レファレンスサービスの金字塔というような存在である。大学院で図書館学を修めたアメリカ人が館長を担当し、図書館司書という仕事が高度な専門職であることを示したのも、このCIE図書館の偉業とされている。さらに、CIE図書館はアメリカ文化の発信を兼ねていたため、英会話教室や映画上映会、ペンパルクラブなども開催された。占領政策の一つ、婦人の解放のために、CIE横浜図書館では洋裁学校の協力のもとにファッションショーまで開催された。CIE図書館の開放的で文化的な雰囲気、日本人に大きな衝撃を与えたことは想像に難くない。

しかし、なぜ、こんな素晴らしい図書館が設置されたのだろうか？ 疑問に思っただけで調査を進めると、図書館設置の裏にあるアメリカの政策が見えてきた。第二次世界大戦時、アメリカはメディアを戦力と捉えて、図書館を情報の伝達機関と位置づけていた。アメリカ市民にとっても、図書館は、印刷物や映画などを通じて情報を得られる場だった。市民が自由に情報を入手できる図書館は、民主主義政策における重要な機関となり、戦後は、占領国に情報センター（図書館）を設置する施策が行われた。この政策で作られた情報センターが、日本のCIE図書館やドイツのAmerika Hausである。

こう考えると、私たちが現在学んでいる心理学、つまりCIE図書館で学んだ心理学者たちが築いてきた心理学は、社会情勢の影響を大きく受けてきたことが分かる。オーラル・ヒストリーで歴史を聴いて歩いていると、語られる言葉の断片から、こんなふうに歴史や社会の大きな潮流を感じることもある。

参 考

今まど子（2013）「CIE インフォメーションセンターの活動」今まど子・高山正也（編）『現代日本の図書館構想：戦後改革とその展開』勉誠出版